



小沼丹作品集
V

小澤書店



小沼丹作品集V

定價三八〇圓

昭和五十五年九月二十日 初版發行

著者 小沼丹

發行者 長谷川郁夫

發行所 株式會社小澤書店

東京都千代田區富士見二一五—十二 郵便番號一〇二

電話 東京(〇三)二六三—九二一八(代表)

印刷 精興社 製本 大口製本

裝釘 山高登

©T. Onuma, 1980 Printed in Japan

目次

藁屋根

藁屋根

眼鏡

竹の會

沈丁花

キユウタイ

ザンクト・アントン

湖畔の町

ラグビーの先生

木菟燈籠

四十雀

185 167 150 141 125 105 59 34 9

瘤	未刊作品	花束	胡桃	入院	「一番」	木菟燈籠	枯葉	ドビン嬢	鳥打帽	エツグ・カツプ	槿花
363		347	328	314	293	273	259	244	225	216	199

解題

珍木

カンチク先生

浄徳寺さんの車

424

412 393 379

小沼丹作品集

V

藁屋根

藁屋根

その頃、大寺さんは大きな藁屋根の家に住んでゐた。正確に云ふと、郊外にある大きな藁屋根の家の二階を借りて住んでゐた。大寺さんは結婚したばかりで、その二階が新居と云ふ譯であつた。その二階の廣さがどのくらゐあつたか、はつきり想ひ出せない。

大寺さん夫婦は、南に窓のある十疊と八疊の二部屋に住んでゐた。その二部屋には疊も入つてゐて、襖もあるし、ちゃんと天井もある。しかし、二階にはその他に廣い板の間があつて、寧ろ、矢鱈に廣い板の間の片隅に、大寺さん夫婦の住む二部屋が出来てゐたと云つた方がいいかもしれない。板の間の方は天井が張つてないから、黒く太い梁や棟が剝出しになつてゐる。太い柱も何本か立つてゐて、階段の上の柱だけ、手の届く所が黒く光つてゐた。

藁屋根

部屋を出ると北に面して廣い板の間があつて、その板の間でも大寺さん夫婦のゐる二部屋より廻かに廣い。明りを探るために北の兩戸を二枚ばかり開けてゐたが、面倒だから全部開けたことは無い。兩戸を開けても、汚れた硝子窓越しに見えるのは、厚く茂り合つた樹立の縁ばかりである。

西の方にはもつと廣い板の間があつて、そこは古びた板戸で仕切られてゐた。そこを大寺さん夫婦は、開かずの間、と呼んでゐた。引越したばかりの頃、大寺さんは細君と一緒にその板戸を開けて覗いて見たことがある。兩戸が閉つてゐて暗いからよく判らないが、無闇に廣い板の間に何だか得體の知れぬものが積んであつて、二人共吃驚した。

——あれ、何かしら？

——何かな……。

——茲もうちなね……。

と細君が云つて、大寺さんは何だか滑稽な氣がした。二階を借りたことになつてゐたから、その廣い板の間も大寺さんの住居の一部と云ふことになるが、細君はそんな暗い廣い所があるのを迷惑に思つてゐたやうである。縦へ使つて呉れと頼まれても、使ふ氣にはなれない。またその必要も無い。板戸を開いたのはそのとき一度だけで、その後開けたことは無い。だから「不開の間」と呼ぶことにしたのである。

多分、二階は昔蠶室だつたのだらう、と大寺さんは思つてゐたが、その邊で養蠶をやつてゐたのかどうか知らない。大寺さん夫婦が入ると云ふので、家主がその一隅に二部屋拵へて呉れたもので、板の間に立つと家のなかにもう一つ小さな家が出來てゐるやうに見える。

臺所も新しく造つて呉れたが、これは階下にあつた。廣い土間の片隅を仕切つて、床板が張つてあつた。そこに新しい流し臺が置かれたとき、大寺さんは何だか珍しいものを見るやうな氣がして見たのを憶えてゐる。便所も造つて呉れたが、これも階下にあつたから、その度に大きな階

段を上下しなければならぬ。それを不便だとも思はなかつたのは、二人共若かつたからかもしれない。

引越した年の暮、大寺さんは知人から鶏を一羽貰つた。その頃は戦争が始つてゐて鶏は珍しくなつてゐたから、大寺さんも細君も喜んだ。細君は何日分かの心算で、大きな鍋に鶏肉入の雑煮をどつさり作つた。元日の朝、大寺さんが食卓の前に坐つて目出度い顔で酒を飲んでゐると、階段の上で細君の頓狂な聲がしたと思ふと、同時に大きな音がした。戸を開けて出て見ると、板の間に雑煮が一面に散らかつてゐて、鶏の油がぎらぎらと光つてゐる。

——駄目ぢやないか。

大寺さんが怒鳴つたら、細君も面白くなかつたらしい。こんな重いものは亭主が運んで呉れても良からう、と恨めしさうな顔をした。大寺さんはその藁屋根の家に二年ばかりゐたが、二年経つてその家を出る迄、二階の板の間には鶏の油が染込んだ痕が黒く残つてゐて消えなかつた。

その家に引越して間も無い頃、大寺さんは散歩に出て林や森や畑のなかを出鱈目に歩いてゐる裡に、方角が判らなくなつたことがある。畑で農夫が働いてゐたから、自宅の番地を告げて道を訊いたが一向に要領を得ない。

——何て云ふ家かね？

家主の名前を云つたが通じない。無論、大寺さんの名前を云つても始らない。想ひ出したことがあるから、

——前に銀行だつた家なんだけれど……。

と云つたら、直ぐ合點が行つて道を教へて呉れた。

その大きな薬屋根の家が昔は銀行だつた、と大寺さんに教へて呉れたのは家主の細君である。昔と云つても、いつ頃のことか大寺さんには判らない。家主の細君は、肥つて眼玉のくりくりした女でよく喋る。そのお喋りに依ると、何でもその家には大金持が住んでゐて、私設の銀行を開いて、取引は近縣にも及んだと云ふ。

——金貸しですか……。

——いいえ、銀行です。

細君は眼玉を丸くして、大寺さんを窘めた。それが何故没落したのか、その邊の経緯は細君も知らなかつたのか、聞いた大寺さんが忘れてしまつたのかはつきりしない。兎も角、その銀行は潰れてしまつたと云つて、細君は世の無常を果敢無むやうな感想を洩らした。大寺さんは多少の縁故があつて、その家の二階を借りて住むことになつた。しかし、銀行が潰れなかつたら、その家は現在の家主の手に渡らなかつた筈だから、従つて大寺さんもそこに新居を構へることは出来なかつたらう。

昔の銀行がどんなものだつたか、大寺さんは知らないが、その家には銀行だつた頃の姿が多少残されてゐた。入口から廣い土間に這入ると、左手に上り口があつて板戸が何枚か入つてゐる。その背後に帳場の如き一角があつて、木の格子が巡らしてあつた。板戸は何れも掛金か錠で閉るやうになつてゐて、銀行の頃は帳場の一枚だけ開けてゐたと思はれる。上り口に面した格子に小

窓が切つてあつて、そこで用件を片附けたものと見える。

——如何ですの、ちよつと坐つて御覧になりませんか？

家主の細君に云はれて、一度、大寺さんはその帳場に這入つて坐つてみたことがある。たいへん間の抜けた感じで、大寺さんは直ぐ立上つて出て來た。

——こんなもの、もう片附けた方がいいんですけれど、主人が面白いから残して置けつて云ふもので……。

と細君は云つたが、案外、細君が面白がつてゐたのかもしれない。

大寺さんは細君の御亭主の家主に會つたことは、一、二度しか無い。家主の細君は階下の矢鱈に廣い所に、女學生の娘と二人で住んでゐた。娘は身體が弱いかで、瘦せて眼ばかり大きかつた。家主は下町のどこかに店を持つてゐて、専ら其方に寝泊りしてゐるらしく、薬屋根の家には減多に歸つて來なかつたやうである。

——そりや、わたしだつてこんながらんとした淋しい所に住みたかないんですけれど、でも娘が弱いもので、娘の健康を考へて玆にゐるんですの。町なかよりこの邊の方がずっと健康には宜しいですから……。

大寺さんは、家主の細君がさう云ふのを聞いたことがある。

引越して間も無く、大寺さんと細君が部屋の整理をしてゐたら、階下から、

——お邪魔いたしますよ。

と頓狂な聲がして、續いて階段を上つて來る大きな足音がした。出て見ると、板の間に家主の

細君と一緒に五十年輩の小肥りの男が立つてゐた。

——主人ですの……。

家主の細君は、何だか浮き浮きした様子で紹介した。大寺さん夫婦が、どうぞ宜しく、と頭を下げたら、家主は愛想好く挨拶した。

——ちよつと見せて頂きませうよ……。

家主の細君は新居を覗込んで、あれこれお喋りする。つまらない道具を見て、まあ、結構ですこと、と亭主を振返る。家主の方はその度に、うん、うん、と笑つて相槌を打つてゐたが、何となく迷惑さうであつた。大寺さんの細君が、

——お茶でも……。

と云ひ掛けたら、家主は吃驚したやうな顔をして、これからまた店の方に戻るから、と辭退した。それを聞いたら、今度は家主の細君の方が吃驚したやうである。

——あら、今夜は、こちらでせう？

——いや、さうも行かない……。

——でも、そんな……。

それから二人は、お邪魔しました、と降りて行つたが、階段を降りながら低聲で問答してゐるのが聞えた。何を話してゐたのか、無論、大寺さんには判らない。何だか妙な感じで可笑しかったから大寺さんが細君の顔を見ると、細君は佛頂面をして大寺さんを睨んでゐて大寺さんは面喰つた。どう云ふことが判らない。